

しまなみ農業だより

冬季は 竹ヤブ管理の 適期です。



今月号では、無理を承知であえて苦言を呈します。竹ヤブの管理です。となりのタケがうちの畑へ攻めてくる・タケノコを採りにヤブに入ろうと思っても入れんようになった・去年はイノシシに全部食べられて1本もタケノコを食べられなかった・タケにかかわるトラブルは様々ですが、根っこは1つ。竹ヤブの管理不足です。

タケノコは採るものでなく作るもの。タケが地下茎でつながり、新芽がタケノコであることはよくご存知と思います。ではタケの木の寿命は何年でしょうか？答えは約6年。毎年タケノコとして新しいタケが生えてきますが、古竹をどんどん更新していきかないと、ヤブは暗くなり、枯れ竹はそこらじゅうに散乱して足の踏み場をなくし、行き場を失った地下茎は新天地を求めて外へ外へと拡大していきます。では適正な竹の密度とは？タケノコを採るモウソウチクの

場合、一坪に一本。多くても二本まで。それ以上にならないよう、新竹は間引き、古竹は三年をめどにほとんど伐採します。モウソウは新竹のとき、節の直下にワックス分が浮いて白い輪が出来ます。年々この輪は薄くなり、3年を過ぎたあたりではほぼ消失します。ですからヤブの中には節が白い太竹がぼつんぼつんとあるのが正しい姿で、タケノコ農家というジャンルが成立する京都では、ヤブの中で傘を差して歩けるようでないとかん、と言い、肥料も振れば電気柵も設置します。このような状態であれば、原則的には竹林内でタケノコが発生し、ヤブが外へ拡大しないといえます。

実はヤブの寿命が近づきつつある

さて、上島町内の竹ヤブに目を転じてみましょう。どこもかしこも剣山のようにタケが密生し、入り込む隙間が見えません。ヤブ中には枯れ竹もびっしりあります。しかもタケノコはイノシシの大好物。放置竹林が冬から春の間の絶好の食料供給地となつています。愛媛大学の武山先生と山を歩いてみると、12月には既にイノシシがヤブの中を掘り返し、タケノコの芽を食べています。昨年は寒さも厳しく、ここ数年の夏の早魃の影響でタケノコの発生自体も少なかったうえに根こそぎ食べられ、今年新竹の発生がほとんどなかったヤブが見られたことに注目しました。こうした事象が続けばヤブはだんだん衰え、枯死してしまうヤブも増え

てくると予想されます。そうなる枯れ竹が倒壊し地表の保持力も衰え、大雨時に思わぬ土砂災害を招きかねません。竹ヤブ管理は一にも二にも伐採で、ほとんど伐採するしかありません。タケの伐採は冬季がよく、タケも程よく乾いていまずし、ムシもいません。春以降はタケノコを採りつつよい新竹を選んで残し、他は早めに蹴り倒しておけば後の伐採の手間が省けます。

これまで出来なかったけれど：

ただし生竹は相当に重く、伐採にも搬出にも結構な労力を必要とします。やればいいのはわかっているが、年を取ってどうにも：近年の竹ヤブ問題の根っこはどこも同じで、農村の過疎化・高齢化とセットになっています。だからといって放置して良いわけがありません。伐採・搬出を共同で行う、大型チップパー等をレンタルして破碎・堆肥化する、といったことを地域で計画的に行う必要があります。竹ヤブ管理はイノシシ対策の面でも重要で、山主の責任でもあります。



台風で倒壊した竹ヤブ(上弓削)
こうなると2次災害の恐れもあります。またよくみると新竹が見あたりません。



イノシシに食害された竹林(12月中旬)



株元の竹の皮(左)



新竹に見られる節部のワックス(右)